

中世曹洞宗切紙の分類試論 (七)

——堂塔・伽藍、仏・菩薩關係を中心にして——

石 川 力 山

一 はじめに

本稿は、中世曹洞宗史、特に地方に広く展開したという特色を有する曹洞宗教団の、布教活動や叢林生活の実態を究明することを目的として、従来殆んど顧みられることのなかった抄物資料の中の切紙資料について、当該研究を進めるための極めて貴重なかつ示唆的意味を有する資料としての位置付けを確立することをめざして着手したものである。そして、まず中世曹洞宗切紙の全体像を把握することを当面の課題として、資料の発掘と翻刻を中心に、筆者の立てた分類項目の順にしたがって連載形式で掲載を続けること六回、すでに三年あまりを経過してしまっただが、いまだ十項の分類項目の第一叢林行事、第二行履物の二種類の関係資料の紹介翻刻を終えたにすぎない。この間、資料調査や資料提供による新たな発見があって、すで先の稿に追加したりあるいは改めなければ

ならない箇所も多数でてきたが、これらの問題を一々再検討していたのでは、切紙資料の全体的な把握が完了するのが何時になるかという目処も立たないということになるので、これまではなるべく資料の紹介翻刻をしながら多少なりともコメントを付して、その資料の有する意義や意味にも触れてきたが、今後は、できるだけ早い時期に本稿の完了を図りたいため、資料紹介翻刻に徹していきたいと思っている。そこで今回は、さほど分量的に多くない堂塔・伽藍関係切紙資料と、仏・菩薩關係の切紙資料をまとめて紹介することにする。

二 堂塔・伽藍関係切紙について

先の稿において、叢林行事及び行履物關係の切紙の紹介は終えたが、これらはいわゆる禪宗の修行道場における日常の生活の実態に関わる切紙であった。これに関連して問題となるのは、禅僧の修行の現場であり、住居でもある禅宗寺院の

結構に關することであろう。すなわち禅宗伽藍建築の実態とその意味ということである。上述の叢林行持や行履物に關する切紙は比較的多く見られることから、中世曹洞宗における修行生活が極めて重視されていたであろうことは髣髴され、したがって堂塔・伽藍に關しても多くの切紙が存するかに思われるが、案に相違して極めて少いことが知られる。しかもすでに紹介した「禅林七堂図」という、通称七堂伽藍といわれる禅宗独自の伽藍配置の問題は、巡堂焼香という、叢林における恒例の行事を説明しその口訣を伝えるためのもので、七堂の配置やその由来については第二義的な意味しか持っていなかったといつてよい。

所で、七堂伽藍という呼称についてであるが、その確かな典拠は不明であるとされる。⁽⁴⁾無著道忠も『禅林象器箋』（第二類殿堂門）で

忠曰、法堂仏殿山門厨庫僧堂浴室西浄為七堂伽藍、未知何拠、各有表相、如図、

厨庫左手 浴室左脚

法堂頭 仏殿心 山門陰

僧堂右手 西浄右脚

止観輔行云、如大経云、頭為殿堂、

摩訶僧祇律云、廁屋不得在東在北、応在南在西、

忠曰、此図、浄即在西南、則合僧祇律說、

と言つており、箇々の堂宇に關してはその典拠や位置が明らかかなものもあるが、その配置や由来に關しては、「七堂図切

紙」にも、

禅林、殿堂何只限七、祖師堂、土地堂、照堂、経堂等不暇枚挙、故中華禅林無七堂說、但於此方禅、喚上所図者、謂之七堂也、

とあるように、極めて不明確で、日本における独特の風のようにも思われる。臨済宗系の禅宗寺院に附随していた工匠の秘伝には、中国の五山第一位の径山の伽藍配置が、曹洞宗の切紙と同様の人体表現の説を伴って掲載されていることも指摘されているが、⁽⁵⁾これを七堂に限定する根拠については不明である。

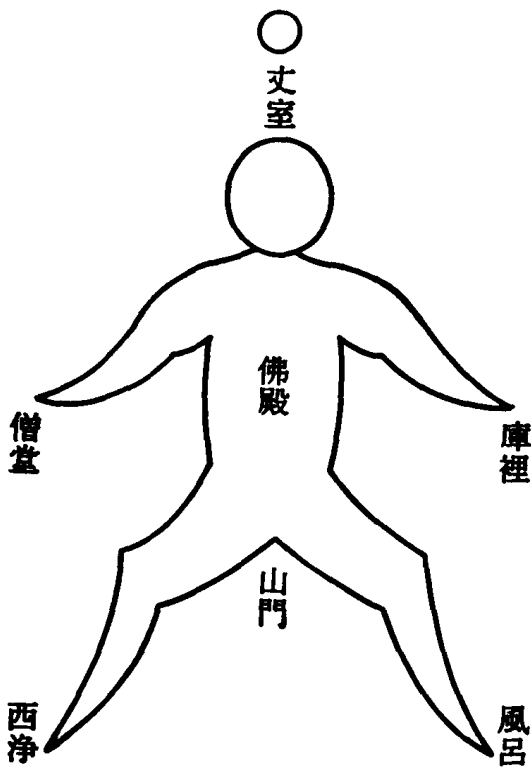
そもそも七堂伽藍という呼称は禅宗独自のものではなく、完全に堂宇が揃っている様子を形容するのが一般的用法であるが、日本古代仏教においてもすでに、法隆寺の塔・金堂・講堂・鐘樓・経藏・僧房・食堂の七種を一伽藍とするという『太子伝古今目錄抄』の記載もあり、天台宗や真言宗等にも七堂伽藍の数え方があったようであるが、⁽⁶⁾しかし、七棟の堂宇を限定するのはやはり後代の説のようである。この点、元弘元年（一二三二）の「鎌倉建長寺指図」にすでに見られるように、禅宗における七堂伽藍の設定は比較的早く、しかも風呂や西浄（東司、清浄ともいわれる）を七堂に含ませるのは、日常生活即修行を建前とする禅宗の立場を明確に反映させているといつてよい。但し庫裡を食堂と記している切紙もある

が、これは面山瑞方が『洞上室内断紙棟非私記』において、
又以「僧堂食堂」分爲「左右」、是暗「建殿堂」者之致説也、僧堂即食
堂、古無「大衆展鉢于厨下」之事也、豈指「厨庫」名「食堂」哉、
口訣亦背「其義」、
〔曹全〕室中、二〇一頁〕
として批判するように、庫裡（厨司、厨庫）を食堂あるいは
齋堂とするのは、古来の叢林の伝統に違えるものであること
は疑いない。食堂等と記する切紙は江戸期のものに限られる
ようである。

「禅林七堂図」の切紙やその参については、上述のように
叢林行事関係の項で数点紹介してあるので、ここでは比較的
古い、埼玉県正竜寺所蔵、六世大久寅碩所伝の天正十七年
（二五八九）の年記を有するものを掲げておく。

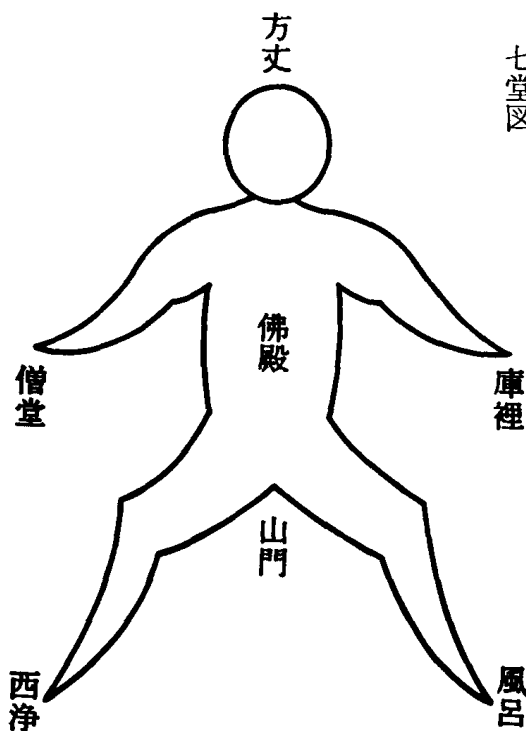
（端裏）七堂図 六代

于時天正十七年五月廿八日 萬歳至祝、
仏殿裡焼香山門頭合掌 可秘々々



礼拝者天地之前之活祖相見ニハ
此一人拝敬此一人守護所也
沙門寅碩
三國伝灯合掌皇帝
この外に、先に紹介したものには含まれない参を含むもの
として、永正・天文頃の伝承を伝える切紙集である駒沢大学
図書館所蔵の『室中切紙』に収録される、福島県長源寺六世
卓眼恩朔から吞（嬾）盛に伝えられた「七堂図」も次に紹介
しておく。

七堂図



仏殿デワ低
頭スル、
子々孫々繁
昌ノ所山門
デハ睥眼ス
ル、

仏殿裡焼香、山門頭合掌与謂、先三拝也、一拝者先「天地」活祖相
見、二拝、三國伝灯之仏祖、三拝、国土平安守「護」此人也、万歳々々
当今之守護也、

從心嶺和尚恩朔和尚附吞盛和尚

次に堂塔伽藍関係の切紙として紹介しておきたいのは「山門之切紙」である。この種のものとしては、管見に入ったものとしては永光寺所蔵久外吞（嫗）良所伝のものぐらいしかない。吞良は加賀宗龍寺二世明庵東察（一六四五）から伝えられたもので、年記はないが、他の同者所伝の切紙類から、元和寛永期のものと見られる。

（端裏）山門之切紙

山門之大夏



蓮花蓋

蓮花門開門出世門

○山門者、諸仏出入門也、一円也、蓮花蓋也、蓮華者、母、開也、諸仏衆生悉皆從此門出入也、故七堂巡堂時、彌勒下生亦生作、為衆生濟度一夏山門、拜念也、○山門、願云、我亦彌勒下生為産、彌勒同坐同行俱玄妙所說者也、但願生々世々見仏聞法出家得道、供養三宝、濟度衆生、成等正覺、○亦三門者、無相門、空門、化門、○無相門者、無極也、空門者、大極、化門者、八卦現成、第二儀方便門也、是即久遠今時未來三也、三蓋二蓋作也、○亦蓮華中三物有之、心、三點、天、地、三也、山門蓮華開、無出入則万物、種絶、万法種子滅也、



釈迦牟尼仏大和尚三門之法嗣嫗良
南無皈依仏南無皈依法南無皈依僧
洞谷山永光紹瑾伝授之 御在判
前総持宗龍明庵東察叟（花押）

この「山門之切紙」は、寺院の堂宇の中の最初に掲げられるべき山（三）門の意義等について述べたものであるが、その目的はやはり、「禅林七堂図」と同様に毎日巡堂の行事を行うに当っての心得として伝授されたもので、「山門」願云、我亦彌勒下生為産、彌勒同坐同行、俱玄妙所說者也、云云」とあるように、巡堂中に山門において観念すべきことが説かれる。これは上掲の吞盛所伝の「七堂図」の参に、「子々孫々繁昌ノ所山門デハ睜眼スル」とあるのに通じよう。

堂塔・伽藍関係の切紙は以上紹介したようなものとどまり、他は殆んど見出せない。先に紹介した永光寺輪住四百七十九世万山林（臨）松書写の「截紙之目録」にも殆んど見当らないので、恐らく中世所伝のものとしてはこれら以外には多くは期待できないものと思われる。常識的に考えるなら、七堂の箇々についての切紙及び参があつてしかるべきであろうが、これらが期待できないのは何故であろうか。確定的なこととは言えないが、禅宗の中でも曹洞宗の伽藍建築は、本山や

地方の拠点となる寺院を除いては、たとえば法堂と仏殿の機能を一緒にし、さらにこれに方丈等の機能も併せ持たせる、所謂客殿型法堂と呼ばれる小規模なものが殆んどであり、これが又塔所影堂を兼ねることもあるという具合で、本格的な七堂が建てられることはまれで、したがってそうした切紙も日常的には殆んど必要なかったからではなからうか。ただし、岐阜県龍泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』には、祖師堂に關して、

△祖師堂ノ参、云、頭々祖師意、物々祖師意テ走、師云、其レハ何ニトテ、云、只聞^キ只見^キ居タ時キ真如法界一如テ走、意ハ、心如^ハ自己^ハ、法界ハ目前^ハ、自己目前一致ノ時スキハ走ヌ、云、定相ナイカ活祖ト見レハ卒トモスキハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、云、柳ミトリ花紅イカ真ノ活祖テ走、師云、其ノ落居ヲ、云、左之右之大定テ走、

という参が伝えられており、この祖師堂の切紙の本文はまだ発見していないが、元来は存したはずであり、また、御影堂において『法華經』を誦することに関する参もあり、この参の本文も元来は御影堂そのものに関する切紙であったかもしれない、その意味では、これら以外にも伽藍に関する切紙が存した可能性はあったことを確認しておきたい。

三 佛・菩薩関係切紙について

堂塔・伽藍に関する切紙が比較的少いことについてはくり返し述べたが、この事実成正比して、堂塔・伽藍に奉祠される佛・菩薩像等に関する切紙についても、現存する資料はやはり少い。堂塔・伽藍に安置奉祠される佛・菩薩として、当然第一に仏殿に安置される釈迦牟尼仏に関する口訣や参が問題になるが、釈迦牟尼仏に関する切紙は、堂宇の本尊としてというよりは、むしろ嗣法の場における意味として論じられる場合が多いようである。これはやはり、禅林における住持を現身の釈迦牟尼仏とし、その説法を聴聞する大衆も「面前聴法底」の「一無位の真人」として見なし、しかも嗣法の場にあつては「唯仏与仏」という禅宗本来の立場を根拠として、その弟子も当来の釈迦牟尼仏ということになり、この道理をいかに領解するかということがむしろ話題の中心になるということである。したがって、本尊仏としての釈迦牟尼仏に関する切紙はめずらしい存在になると見てよい。また、釈迦牟尼仏は極めて象徴的な記号的形体をもって画かれることもあり、これにさらに説明が加わることになるが、この種の切紙からまず紹介しておく。それは「釈迦判形」と呼ばれる切紙であるが、まず、三重県広泰寺所蔵、寛永十七年(一六四〇)融山から英利に伝えられた「釈迦判形」切紙は、

(端裏) 釈迦判形

于時寛永十七庚辰季三月吉日良辰

花叟御在判

釈迦之御判形



金龍山海眼院住持融山叟附英利畢

(印)(印)

というものである。また釈迦判形と同じく、卍も、象徴的記号として仏教の宗旨を表現しているとして、しばしば大事やその他の切紙類にも依用されるが、「釈迦判形」と「満字(卍)」を一緒にした切紙として、同じく広泰寺所蔵、年記不明、梵林□洲より謙明長老に伝えられたものがあるので、ほぼ同様のものであるが、これも次に掲げておく。

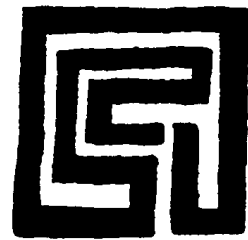
(端裏) 釈迦判形
満字判形

釈迦判形



中世曹洞宗切紙の分類試論(七)(石川)

満字判形



現地藏梵林洲叟

(印)(印)

伝附

謙明長老

また、この「釈迦判形」切紙について、その由来や意義、諸仏諸菩薩諸神に展開することにもまでも言及したものととして、埼玉県正竜寺所蔵の「釈迦御判」切紙をあげておく。この切紙は、年記・所伝者ともに不明であるが、その筆蹟から同寺九世普満紹堂(一六〇一—一七六〇)所伝のものと思われる。

(端裏) 釈迦御判
釈迦之御判

右此者、釈尊御出世之時、鷲峰之麓七十計之老翁有、問、汝何者、答云、山口大明神也、此諸仏出世之梵字有、号□是則諸仏尊之始也、以是十方之如来守護終也、月氏穆王八迎駒乘、須臾詣仏前、問此判、伝授九万八千歳治給也、亦本朝之神武天皇、住吉大明神、此判伝授、王武輪王出之俳此判、云云、



天童如淨和尚附道元和尚

（端裏）光明凶之大事

光明大事

頂上円結卅字、本形也、心字也、心者一円也、畢竟無始無終儀也、根本、本心、乾坤開闢已前、以前有之、心者不藏不現不生不滅也、次、黒円無極也、本有天然一位而无始末、邊際、故不生不滅也、不去不來也、如々、本仏以無相為即体、以無性為本性、更無ニ生滅現然、雖ニ世界壞、渠更不レ朽、不尽靈如即体也、是謂ニ清淨法身仏也、次、自圈兒大極也、本心仏無相無形、則、諸仏滅尽、而不レ能ニ人畜出生、故空却已前、妙心大極、地出生而其形露也、併未ニ徒世無業染ニ塵垢、未レ出ニ空王殿、故謂ニ円満報身仏也、形造露、雖ニ淨土安座、未ニ天地発、不ニ人畜出生之際、無ニ化度利生心、未レ出ニ内院、故有ニ諸仏樓閣也、畢竟中心、謂ニ弥陀釈迦弥勒、宝勝大日、諸仏諸菩薩、諸神也、元無名故、依レ所別号、悉本心仏仮名也、実名無名也、譬如仏説、一切衆生悉有仏性、間、一仏一心一性一身也、具足一仏雖無之異名、仮境仍得レ号ニ、其仮名、能々弁了可ニ当意即妙、次、化円、万法現成有為轉變、变化相也、一心一仏一花開五葉而一体分身也、塵々利々分露也、円中心、本仏也、種々無量、化相為ニ尺大地、群類一切、衆生化度也、故有情非情同時成道也、四生群類俱全排ニ他身、或如來毫光從ニ円中ニ發生而塵々利々偏満、是本心漏現也、円中心本有、如來也、或光明四十八、或六十四、或一万二千五百二十、無欠無余也、此見則、数不定也、一毫穿衆穴也、一毫光十方利土満漏、自ニ無極ニ大極、一易二儀、四像八卦、八々六十四、一万二千五百二十分、離也、千々百々化身而三界迷妄為ニ救濟一也、

四十八光則、弥陀、四十八願也、然円光則、無欠無余也、閻浮八
万四千城分身也、併迷衆生、妄惡纏住、三十六万億一十一万九千五
百里無隔、一心契証、本心仏発生、則、諸仏現前、以迷諸仏
云滅度、以悟諸仏云来向、自他一致、則、一心一体无
別体、十方眷属八万四千毫毛也、千百万像塵々刹生化身也、
亡起、本心働著也、満境滅尽、則、卦盤捲却、冥目宣久也、満境
泯、則、種罪滅尽、甚、麼有苦楽、麼、万般切断而無他念、是
也、切忌、二念繼、諸仏向、外莫求、仏心宗第一之秘伝也、
迷、則、雖、同座同行、不看顔、悟、則、雖、五欲身、一名、仏体、
即心即仏

宣元和三八月吉日 東葵（花押）

附与嬖良沙門畢

これらの釈迦牟尼仏理解のための切紙については、ここで
は詳しく言及しないが、この象徴的図をもって師資の証契の
内容を示そうとしたのが「勃陀勃地切紙」である。この種の
切紙は、表面的には言句の解釈に終始しているが、その意図
するところは、釈迦牟尼仏を現実の場に出現せしめることに
ある。長野県大安寺所蔵、天正七年（一五七九）、大沢寺七世
雪庵龐（法・正）瑞（一五八八）より正透に伝えられた「勃
陀勃地切紙」は、

釈迦牟尼仏勃陀勃地摩訶迦葉勃陀勃地
次弟如是龐瑞勃陀勃地正透勃陀勃地

△円相縦横円転只、故無終無始自在縦横也、即是蓮華法蓋ト云
也、

△勃陀勃地梵語也、此者菩薩摩訶薩、心仏心而外相菩薩相也、
嗣書如此可書也、

△仏祖命脈証契即通坊主即通、

至祝々々至禱々々 在判

翻訳勃陀、覺智也、勃地、潔々也、潔、潔地也、

于時天正七 卯年八月吉日 龐瑞（花押）

（印）

附正透禪伯

というものであり、長野県龍洞院所蔵、同寺三世底山正（元）
徹より千照正三（珊）に伝えられた「勃陀勃地切紙」は、

（端裏）勃陀勃地切紙

（綱カ）

勃陀勃地者、言仏悟司位之謂也、又不是翻語訳詞歟、又至九位
也、棲無位真人也、伝法時、膝行合血瀉瓶統坐具瀉水逸行良方
也、正左中右、左転右転天関地軸、天関左転、地軸右転也、転
半字、法輪、請、正字法輪、去、正字法輪、除、半字法輪、又云、半
字有正字、々々半字在也、

緣豆者、言野豆子也、授戒之時統_ニ松勢_ニ云也、授戒者虚空□也、此故見宝塔品云、從地涌出住在空中、云云、言擎_上虚空凡聖一味相授也、一戒中接十戒也、又十戒接九戒也、又授戒道場中鼻音匿誦在之、又攝戒云、事在之、

恠服者、紫伽梨也、我家不可着用也、

明峰高弟松岸淵和尚遠孫明倫首座深秘之本謹拜写也、

皆慶長六_辛年九月吉日

底山正徹(花押)

正三伝之

というものであり、これら切紙に見られる釈迦牟尼仏は、教理学もしくは図像学的に釈尊の本形を追求するというよりは、自己の内なる釈迦牟尼仏の本質を見究めようとする方向に求められよう。

このように世界に遍満する意味での釈迦牟尼仏という考え方は、過去現在未来における無量の釈迦牟尼仏というものを導き出すことになるが、そのうちの七仏という考え方に関する切紙として、府中高安寺蔵、貞享五年(一六八八)同寺九世大器保禪所伝の「三世七仏之切紙」は、

(端裏)三世七仏之切紙

過去七仏

南無毘婆尸仏 滅_ニ五百億劫之生死_罪、

南無尸棄仏 滅_ニ九百億之生死_罪、

南無毘舍浮仏 破滅地獄業、永不墮惡道、

南無拘留孫仏 消無數劫生死之罪、

南無拘那含仏 消三十万劫之生死_罪、

南無迦葉仏 消九百億恒河沙劫生死之罪、

南無釈迦文仏 消七百億劫生死之罪、

現在之七仏

南無宝勝像仏 滅一生所得信施罪、

南無宝王光雲照仏 滅一生所乘牛馬之罪、

南無一切花香自在力王仏 滅一生姪欲之罪、

南無百億須弥決定仏 滅一生殺生罪、

南無信威陀仏 滅一生瞋恚之罪、

南無宝王月殿妙尊音王仏 得_ニ八万法藏誦誦之功德_一、

南無金剛堅固照惠散仏 滅無間罪業也、

未来之七仏

南無治地仏 滅一生行步殺生之罪、

南無月光面仏 滅生々世々之棄愛□宿姪犯罪、

南無々量勝仏 滅十二時中所犯之罪、

南無一万金迦羅王仏 滅六根所犯之罪、

南無旃檀香仏 滅一生信施之罪、

南無六千万□就喜見仏 滅一生肉食之罪、

南無宝幢仏 臨終見十方諸佛諸菩薩、

(以上、原本は三段に作る)

摩訶大迦葉同之唱礼之云云、今写施以為後毘之龜鑑、世々之有志之人可_レ修焉矣、

皆貞享五_戊辰五月吉辰

保禪拜書

というものであり、このうち過去七仏だけに關する切紙としては、永光寺所藏、年記不明の「七仏名号」切紙があるので、次に掲げる。

七仏名号 南山道宣律師五台山文殊師利之御相伝之秘密大(タマシ)事

○南無信威徳仏 ナムシヨウカイセツフツ 是レ一生之間之願恵之ザイラメツス

○南無宝王月殿妙道音王仏 ナムハウワツケツインメウドウオンワツフツ 是レ一度トノウレバ、一生ノアイタ、一切経論シヤウキヤウヲトノウルニ同コト

○南無宝勝像仏 ナムハクシンゾウゾフチ コレ一度トノウレバ、一シヤウノアイタノ信施ノザイラメツス

○南無宝王光烟照仏 ナムキョウワツクワウエンシヤウゾフチ コレ一度トノウレバ、一シヤウノアイタ、牛ムマニノルザイラメツス

○南無花香自在力王仏 ナムヒヤクワクシユミシチリクワフチ コレ一シヤウノアイタニ一度トノウレハ、男女ニフルザイラメツス

○南無百億須弥支定仏 ナムヒヤクワクシユミシチリクワフチ コレ一シヤウノアイタニイチドウトノウレバ、セツシヤウラメツス

○南無金剛堅固照恵散仏 ナムコンダケンコンシヤウエンサンフチ コレ一シヤウノアイタニイチドウトノウレバ、地ゴクノザイラメツス

右七仏名号相伝仕トテ、心ヲ以諸罪作バ、是外道ノ人也、当来ハ必ス地獄入可キモノナリ、心ノ作シテ元トノ惡罪滅也、一大夏ノ心得大夏、可秘々々、

さらに、七仏の総体についての参として、広泰寺所藏、年記、所伝者不明の「七仏大夏之参話」も次に掲げておく。

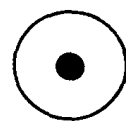
(端裏) 大夏参話

七仏大夏参話



朱円相中有黒卐字相、謂之右卐字図、空劫以前更以前夏也、師示曰、其意如何、学人進前以衣袖蒙頭而坐言ハ、表未出母胎、此胞胎衣中、無物与不兼、即

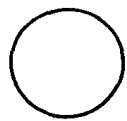
万萬徳円満、大卐字、云者也、師云、卐字因甚存黒相、学曰、混沌未分東西無弁、正当那時即是墨卐字也、師云、開外朱円相其意如何、学人繞ス、師一匝坐、即是表顯露分明底朱円相也、



此ノ相ヲ謂之墨赤兩円ノ相、師示曰、中間墨円如何、学人進前默然坐、即是表心空無相墨円理、師云、外門朱円其意如何、学人云、心随三万境二転々処、実能幽也、即是仏々祖々、番々相承、展転流通、随三万境二転底之朱円相也、



此相謂之赤心図、師云、此図夫意如何、学人曰、船上掛三鼓、三鼓表法報応三身、過現未三心、相統円備之相也、



此相謂之空相図、師云、此図夫意如何、学人云、只此心空仏祖所護念也、



此相ヲ謂之紅心図、師云、其意如何、学人云、卐字即心、々々即卐字、只此一図空相、仏々命根、命脈者也、

これら過去七仏等の名号に關する切紙がいかなる意味を持っていたかということがここで問題になるが、『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』や『七仏讚唄伽陀』によれば、各仏に付属する陀羅尼を誦すると、その威神力によつて重罪や業障が除かれるとされており、「三世七仏之切紙」や「七仏名号」の切紙における各名号下の細字は罪障除滅に關する記載であり、おそらくは礼仏等の儀礼における口訣としての意味を持

っているものと思われる。したがってこれらの切紙は、筆者の分類項目にしたがえば、第八の儀礼の項に入れるべき内容かもしれないが、具体的にいかなる儀礼であるか不明なので、ここでは一応仏・菩薩の項に収録しておくことにする。

これら名号関係の切紙と同様に、やはりなんらかの儀礼に付随すると思われる名号関係の切紙に、「念仏切紙」がある。しかしこの場合も、曹洞宗独自の念仏の解釈であり、念仏の一語ずつに六道や日本の神道の諸神を配するという、むしろ名号に関する解釈という意味を持っていると思われるので、これも次に紹介しておく。まず、貞享五年、高安寺大器保禪の「念仏切紙」は、

(端裏) 念仏切紙

先ッ念仏ト者、眼耳鼻舌身意、六色六根六境界ト可心得、

(南) 天道 (無) 人道 (阿) 修羅道 (弥) 餓鬼道 (陀) 畜生地 (佛) 地獄道

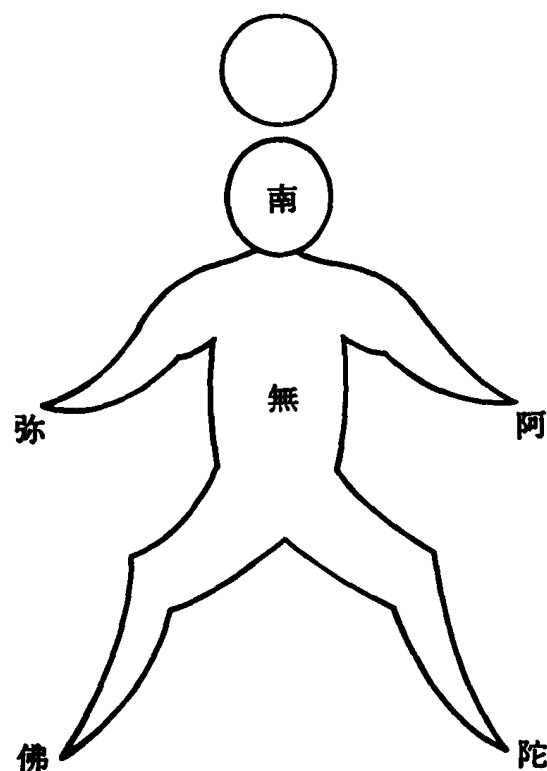
私云、地獄ト云モ此一境界ニ在ルト可心得、一切経億当也、

大般若経廿八億当也、大乘経廿億当也、一切万経九十億当、法

花経三万九千億当也、

天照大神、熊野山八幡大菩薩、十六善神、三宝荒神、三十番神、過去現在未来地獄共爰出現ト見ベシ、

亦爰デ三界唯一心共心得、畢竟我在三昧我亦不知、亦出円通亦入円通、



念仏大夏可秘之者也、

▲先ッ是ハ一円相ヨリ出テ亦タ此円相入、扱引キ分ケテ見レバ凡夫ヨ、扱テ鐘ヲ打テ念仏ヲ申スワ行人ヨ、其ヲワ念仏トワ云ワヌゾ、我が家デノ念仏ト云ワ、大地ガ鐘子、足シヲシモクトナシタコト心得テヨク走ゾ心得ベシ、是レワ大夏ノ切紙也、快叟和尚御扱也、

于時貞享五辰年三月吉辰

家岩叟(花押)

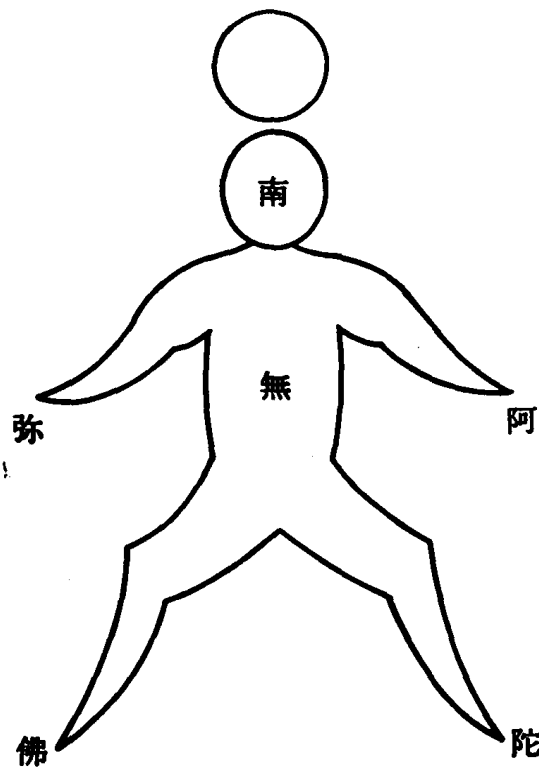
於海禅室中 伝写

保禅九拜

というもので、禅林七堂図と同様に、人体の表相に名号を配する。同じく、長野県徳雲寺所蔵の元和六年(一六二〇)所伝の「念仏之切紙」は、

(端裏) 念仏之切紙

先ッ念仏者、眼耳鼻舌身意之此六色也、六根六境界也、天道修羅餓鬼畜生道地獄道是々、先ッ是レハ從一円相出々、又円相入ル、引キ分テ看ルワ凡夫ヨ、諷テ鐘スヲ念仏ヲ申スワ行人聖人ヨ、夫レヲ真トノ念トワ云ワヌソ、我家デノ念仏ト云ワ、大地方鐘、足シガシモクト成シタル呈、鉄棒ガドコエ当ルベキソ、我相人相無キ故ニ、閻羅之鉄棒放下ヨ、



宗門大事念仏之切紙 容易不可致者々

元和六歲^{庚申}極月吉日

書之畢

というもので、参の内容は高安寺所蔵の切紙と同旨のものと見てよい。珍らしいものでは、永光寺所蔵、年記、所伝者不明ではあるが、江戸初期の筆写と思われる「法華大事」とい

中世曹洞宗切紙の分類試論(七)(石川)

う切紙で、

法華大事(仮題)

法華日蓮血脈也、常秘画□也

一切經一部

大般若經一部

大集經卅部

南

天道

無

人道

阿

修羅道

伊勢天照大神

熊野三所権現

八幡大菩薩

六字修行動月是法花之大事至極也、可不他言也

法華大事、本満寺日及

一切經一万九十部

法花經廿一部

過古現在未來

弥

餓鬼道

陀

畜生道

佛

地獄道

十六善神

三宝荒神

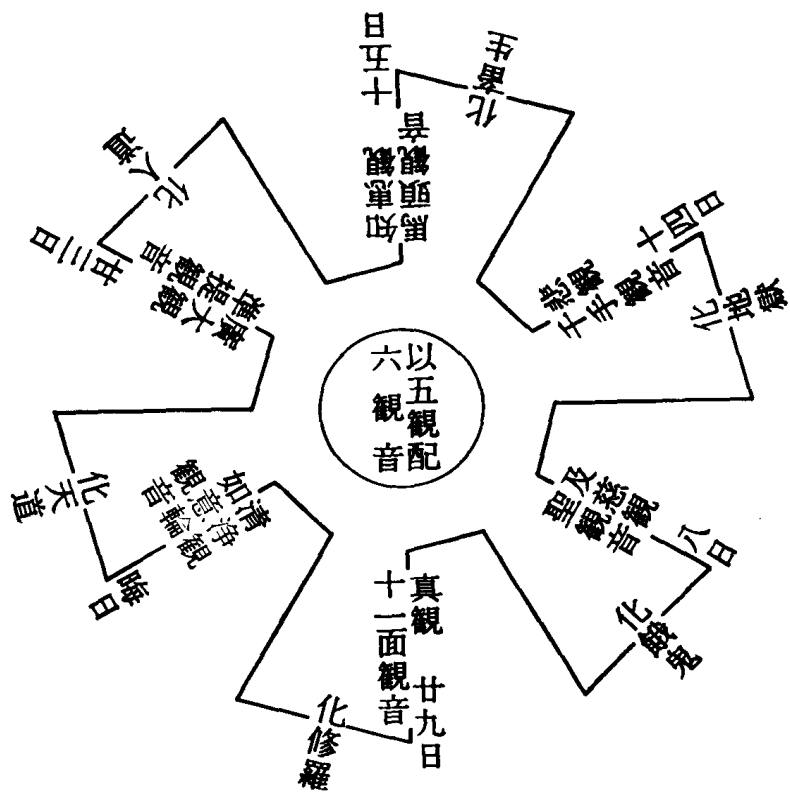
三十番神

というものである。六字の名号に經典や六道、日本の諸神を配するのは高安寺所蔵の「念仏切紙」と同旨であるが、その伝承を「本満寺日及」なるものよりの所伝としており、「法華日蓮血脈也」という記載も見えることである。「仏」に配される三十番神に対する信仰は日蓮宗に独特の展開が見られるものであり、本満寺も、京都今出川に存する日蓮宗寺院であろうと思われる。日蓮宗と曹洞宗の関係については、從來全く論じられることはなかったと思われるが、切紙の伝承にその関係が見出せることは今後の課題として注目される。

六道に關係する仏・菩薩といえ、六道の衆生の教主として配される六体の觀世音菩薩、すなわち六觀音がある。この六觀音に關係する切紙として、中世書写のものはまだ見出しがないが、広泰寺所蔵の切紙の中から、寛政九年(一七九

七) 書写伝授のものを次に掲げておく。

六観音図



六観音配六道事、恵心云、千手地獄、聖観音餓鬼、馬頭畜生、十一面修羅、準提人道、如意輪天道、六上加三不空絹索、為七観音、又加三白衣相、為八観音、加三楊柳救世為十観音、是皆於一観音上随功德事相立名也、六字章句陀羅尼經、有六道音之名、一、大悲観音千手也、二、大慈観音聖也、三、大光普照観音十一面、四大梵深遠観音如意輪也、五、天人丈夫観音準提、六、師子無畏観音馬頭、

(中略)

寛政九己壬七月

現董広泰大巖輩老衲(印)(印)

伝附

転輪長老

このうち、十一面観音に関する切紙は、永光寺所蔵のものに見られるので、年記、所伝者不明であるが、これも次に掲げておく。

十一面観音之夏

此観音十一面現、夏ハ、空仮中ノ三昧之御資願、先向之三面ハ、中道ノ三諦ヲ表ス、左ノ三面ハ、仮諦ノ三諦願、右三面者、双照之三諦ヲ願、双照トハ、有無等夏也、後之二面ハ、觸一□之諸法実相表、合十一面、是後置ク心者、□近ノ□也、空諦上方法悉皆絶シテ、一言ノ□処エ仮諦者相アルカト思バ、柳ハ緑花ハ紅ト目前ノ有様ヲ見ヨ、中道トハ無カト思エバ有、有ルカト思エバ無也、有バ有共無トモ、言語ニ不レ及処、中道ト云、故ニ中道ノ処ニ三諦ヲ備、仮ニモ空ニモ三諦有ルト云ベシ、是大無定教ノ戒定恵ト云ベシ、是仏法之相源也、

六道輪廻の衆生の救済に六観音を配することは、すでに智顗の『摩訶止観』に見られることであるが、後者の十一面観音の口訣も、全く天台教学に依拠したものである。

以上のほかに、『仏家一大事夜話』に所収の参には、

△諸堂ノ本尊ニ何トテ普賢ヲバ用タソ、云、一切衆生ヲ普ク導シウル為テ走、謂レハ、灵山テ祠堂法吊テ有ツタト云説モア

リ、亦賢ヲミチビクト云テ用ルカ、師云、普賢ノ境界ヲ、云、徹底無心無念ノ時キ三界ガ普賢ノ境界テ走、師云、其落居ヲ、云、一片湛然時、定水ニノ心水清浄テ走、畢竟ハ、坐禪正當、私云、此ニ云フデハナケレトモ、平生云々ソ、且那ヲバ仏ノ如クセヨト云向ソ、

とあり、普賢菩薩に関する切紙が存したことが知られる。ただし、これが諸堂としていかなる堂宇に奉祠されたかは不明である。

同じく『仏家一大事夜話』に収録される参として注目されるものに、「十三佛」に関するものがある。この十三仏に関する切紙が中世末頃に存したであろうことは、前記の永光寺輪住万山林松の『截紙之目録』にも「十三仏之切紙」が明記されていることから知られる。その参は、

十三仏参、第一不動ヲ、代、無心無念ノ時キテ走、師云、其証
拠ヲ、代、一念不生、全体現、師云、何ントテ火烟ヲバ立テタ
ソ、代、智光ヲ発シテ走、師云、死人ノ請取羊ヲ、代、一息截
断ノ時節、罪業ヲ焼却シ妄想ヲ縛接シテ走、師接、□時如何、
代、後念□ゾント切テ走、師云、サウソドコエヤラシメタソ、
代、本空エヤラシメテ走、師云、何ントヤラシメタソ、代、作
一円相、師云、救イ羊ヲ、代、良久ス、師云、其証拠ヲ、代、
空合、空、以上九位、

△第二釈迦ヲ、代、法界円満ノ仏テ走、師云、証拠ヲ、代、ト

ツコモ此一仏テ挂テ走、我鬼畜生修羅人天共ニ余ルヲモナク欠
ルヲモ走ヌ、師云、死人請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、一字
不説テ走、師云、時節ライエ、代、申ウトシタハ誤テ走、師
云、サテ云イテハ、代、トック申テ走、師云、誰レカ聞イタ
ソ、代、空カ聞イテ走、師云、救イ羊ヲ、代、一仏成道ノ時、
乾坤大地森羅万像、有情非情共ニ救イ了テ走、師云、畢竟ヲ、
代、一念心中ガ無相無形ノ一仏ノ同体テ走、以上八位、

△第三文殊境界ヲ、代、大智カ文殊ノ境界テ走、師云、大智、
代、天地人仏衆生ト始ヌ、先キノ智テ走、師云、ドコヨリ発生
シタソ、代、心ヨリ発生シ□□、師云、請取羊ヲ、代、一息
截断ノ時節、智慧モ利根モ入リ走、又師云、其ノ智□□ヨリ求
メタワ、代、自然智無師智カ如来ノ智見力テ走、師云、其智ヲ
ドコエ放下シタソ、代、一息截断ノ時節、能ク捨テ走、師云、
救イ羊ヲ、代、坐禪一会ノ時、尽虚空徧法界カ本師本仏テ走、
七位、

△第四普賢ノ境界ヲ、清白円明ノ処カ普賢ノ境界テ走、師云、
其ノ境界ヲ、代、ヒット坐下ノ端的テ走、師云、其ノ境界ヲ、
代、末爰カ普賢テ走、師云、請取羊ヲ、代、良久ノ云、末爰ガ
普賢テ走、師云、普賢ノ境界ヲ呈露セヨ、代、兀坐ノ端的、尽
大地カ一ケノ白馬白象テ走、師云、白象白馬ヲ、代、尽大地ガ
其儘ト見タ時、別テハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、代、悟リ一点テ
走、以上七位、

△第五地藏ヲ、先ツ地ヲ、代、尽大地カ并ノ一智テ挂テ走、師
云、藏ヲ、代、諸仏衆生森羅万像モ爰ニ収リ爰ヨリ出テ走、師
云、爰トハトコロ云タソ、代、法地テ走、心ヲ仏法ノ地ト云心

也、師云、請取羊ヲ、代、其ノ境界ヲ引カヘズ、其、儘心空ニ引道シテ走、師云、引道シ羊ヲ、代、根本ノ時^キ地獄モ無ク天堂^ハ走ヌ、亦虚空陰々トメ錯^{サカ}杖ノ声斗リテ走トモ、師云、地藏ノ手中玉ヲ云ヘ、代、不老ノ妙藥テ走、亦真珠テ走トモ、師云、何ント顯シ何ント服シタソ、代、一息截断ノ界イ顯シ服ノ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽十方一果ノ明珠テ走、師、其証擲ヲ、代、ドッコモ此仏性テ拄テ走、九位々、

△第六弥勒ノ境界ヲ、代、不出ノ一仏テ走、師云、証擲ヲ、代、一氣未発ノ処ニ徹底シテ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、仏法不現前、不得成仏道、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、弥勒ノ樓閣ヲ推開シテ走、師云、弥勒ニ相見シ羊ヲ、代、根本□至テワ何レニモ無ケルヨト相見シテ走、師云、畢竟ヲ、代、衆生無キ処ガ仏性テ走、師云、仏性ヲ、代、過現未共ニ一仏心性テ拄テ走、以上七位々、

△第七藥師ノ本体ヲ、代、餓鬼——天祖仏凡草木土石ノ命根命脈トナリ、亦精魂ト成テ走、師云、瑠璃ノ壺ノ持シ羊ヲ、代、乾坤必塞ス、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、病即消滅シテ走、師云、消滅シ羊ヲ、代、寂滅為樂テ走、師云、^(術カ)師云、不老不死ノ一人ヲ、代、乾坤大地第二人無、師云、十二神出テ守護シ羊ヲ、代、其レノニ守護シテ走、師云、其レノニ守護シ羊ヲ、代、柳緑ト守護シ、花紅イト守護シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽大地が一藥テ走、此時キ地獄ハ走ヌ、八位々、△第八觀音ノ全体ヲ、代、一寸ト見一寸ト聞イタ時、徹底觀音^(音テ)テ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、無心無念ノ時キ処々觀□□走、師云、請取羊ヲ、代、トッコモ補陀洛山ト見タ時、罪無罪トモ

円通普門□テ居テ走、師云、觀ヲ、代、ミル当位テ走、師云、音ヲ、代、聞ク当位テ走、師云、証擲ヲ、代、端的ノヲ失スル時テ走、師云、三十二ノ相ヲ現シ羊ヲ、代、能ク識情ヲ尽セバ色々ニ出現シ種々ニ流通シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、トッコモ円通□見タ時、極樂ナラン処ハ走ヌ、以上八位々、

△第九勢至本体ヲ、代、根本ノ一心テ走、師云、夫レハ何ントテ、代、本師本仏テ走、師云、汝^カ境界デハトコテ見タソ、代、無心無念ノ時キテ走、師云、請取羊ヲ、代、日月ノ光リノ至ラヌ処ニ導イテ走、師云、導キ羊ヲ、代、良久ス、師云、其ノ心ヲ、代、端坐一念ノ時、久遠ヲ越テ走、師云、救イ羊ヲ、代、迷モナク悟リモ無イ処、導イテ走、師云、迷悟ナイ処ヲ、代、仏モ衆生モ隔テハ走ヌ、

△第十阿弥陀ノ本体ヲ、代、過去久遠劫ヨリ尽未来際迄^キ尽ヌガ無量壽仏テ走、師云、証擲ヲ、代、無心無念ノ時、此ノ境界ヲ歷□□去リモセズ来リモシ走ヌ、師云、罪人ヲ請取リ羊ヲ、代、此境界ヲ離レタ時ドッコモ唯心淨土テ走、師云、其レハ何ンタル時節ソ、代、四十八願モツキノテ何ニモナイ処テ走、師云、其レハ何トテ、代、只阿吽^クノ二字迄テ、走、師云、其証擲ヲ、代、南無阿弥陀ノ声ハカリテ走、師云、罷參ヲ、代、岩上無心風来□レタ迄テ、走、師云、救イ羊ヲ、代、只南無阿弥陀仏迄テ走、師云、又一羊ヲ、代、□□陀仏□滅無量罪、師云、畢竟ヲ、代、更參ヨ卅年、以上九位、△第十一阿闍仏ノ心ヲ、代、トッコモ此一仏性テ拄テ走、師云、其レハ何トテ、代、キット良久ノ、末此端的テ走、師云、請取羊ヲ、代、学合掌シテ、ア、タウトノ仏ケヤ、後生助ケテ

給ワレ、師云、其レハ何トテ、代、ヤラタウトノ御声ヤ、亦、ヤラ修証ノミ声ヤトモ、師云、畢竟落居ヲ、代、只去也、師云、救イ羊ヲ、代、末此ノ境界カ本覚法身蓮心城テ走、師云、畢竟ヲ、代、法尚応捨、何況非法、

△第十二大日ノ全身ヲ、代、本地法身仏テ走、師云、本地法身仏ヲ云へ、代、至^{（至）}學本學、五十二位ノ仏々祖々、有情衆生、智明々タル光明ヲ學テ走、師云、請取ヲ、代、トッコモ此灵光テ照ノ走、師云、灵光ヲ、代、虚ニノ灵、空ノ妙ナリ、師云、妙処ヲ、代、父ノ一滴ノ露カ母胎ニ滴ラヌ先キテ走、師云、金胎ノ兩輪ヲ、代、天ト始リ地ト分チ、陰ト通シ陽ト和合シテ走、師云、和合シ羊ヲ、代、天地人ノ境界カ金胎、本体テ走、師云、証拠ヲ、代、柳緑花紅、師云、救^{（羊）}□□ヲ、代、徹底性ノ時キ沙汰ハ走ヌ、

△第十三虚空蔵ヲ、代、尽乾坤徧法界、此一仏性ニハラマレテ走、師云、虚空蔵ニ徹底シ羊ヲ、代、良久ノ、末此ノ当頭テ走、師云、請取羊ヲ、代、虚空々々ノ会ヲナサレバ即法身、々々ノ会ヲ不作即虚空テ走、師云、極重惡業ノ救イ羊ヲ、代、不会ノ凡夫ガ即聖人テ走、師云、虚空蔵ニ相見シ羊ヲ、代、キツト良久ノ云、只コレノ、師云、其ノ心ヲ、代、総^{（ナリ）}在此中円、師云、吊イ羊ヲ、代、只吞只歌へ、師云、其レハ何トテ、代、孝満テ走、師云、三十三年回向シ羊ヲ、代、有為空無為空畢竟空テ走、師云、畢竟落居ヲ、代、何ント説イタモ、皆アトテ走、師云、行李、代、何シニモナイ処テ走、師云、供シ応シ羊ヲ、代、春ハ百花ト応供シ、夏ハ涼風秋月冬雪ト応供シテ走、師云、諷經シ羊ヲ、代、鴉鳴雀噪、一々妙音テ走、□□畢竟

如何、代、摩訶般若波羅蜜、師云、扶ケ羊ヲ、代、舞ウツ歌ウツサイツサレツシタ時扶テ走、師云、扶リ羊ヲ、代、何者カ有テ扶リ走ゾ、師云、畢竟十三仏ヲ一句ニ云持来レ、代、根本一仏ニシテ二仏ハ走ヌ、又師云、猶モ子細ニ、代、畢竟幻亡テ走、以上十八位、当門徒秘參へ、

というものであるが、問題は、この参の切紙の本文がいかなる意味を持っていたかである。

十三仏に対する信仰は、十王信仰とともに地獄信仰に基づく、六道に輪廻する衆生の救済に発するもので、中世室町期から日本では亡者の中陰及び年忌の法要の際の本尊とされるにいたった。しかし、上記の参の内容を子細に検討し、第一不動の「師云、死人ノ請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、罪業ヲ焼却シ妄想ヲ縛接シテ走」、第二釈迦の「師云、死人請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、一字不説テ走」、第五地藏の「師云、請取羊ヲ、代、其ノ境界ヲ引カヘズ、其儘心空ニ引道シテ走、師云、引道シ羊ヲ、代、根本ノ時地獄モ無ク天堂モ走ヌ」、第八觀音の「師云、請取羊ヲ、代、トツテモ補陀落山ト見タ時、罪無罪トモ円通普門□□テ居テ走」、第十阿弥陀の「師云、罪人ヲ請取リ羊ヲ、代、此境界ヲ離レタ時ドッコモ唯心淨土テ走」、第十一阿闍仏の「師云、請取リ羊ヲ、代、学合掌シテ、アムタウトノ仏ヤ、後生助ケテ給ワレ」、第十三虚空蔵の「師云、吊イ羊ヲ、代、只吞、只歌へ（中略）師云、

三十三年回向シ羊ヲ、云云」等とある参を見るなら、この十三仏の機能は目前の死者に直接関わるものであることは明らかである。すなわち、「十三仏之切紙」とは、元来は葬儀に関するものであったということである。現在のところこの十三仏に関する切紙についてはまだ発見していないので、具体的にいかなる儀礼のためのものであったかは不明であるが、筆者の切紙分類項目では、第五の追善・葬送供養の項にはいるべきものであろうが、この参のみでは確定的なことは言明できないので、一応仏菩薩の関係として紹介しておくことにする。

このことに関連して言えば、中世の中期から末期にかけての地藏信仰や十三仏信仰は、単に来世に輪廻して悪道に墮することに対する恐怖という漠然としたものではないことも知られる。それは、たとえば「亡者受戒切紙」によれば、

道場莊嚴如^レ常、壇上^ニ設^ニ地藏菩薩牌、下肩設^ニ亡者牌、戒師向^ニ壇三拜、秉^レ炬焼香微音唱云、南無一心奉請三界六道化導濟度地藏菩薩摩訶薩、唯願降^ニ臨道場、授^ニ菩薩清淨大戒、慈愍故、^三唱、就座唱云、物故某^{信女}從^ニ今身^ニ至^ニ佛身^ニ迄、南無帰依佛南無帰依法南無帰依僧、^三唱、次^ニ撰律儀戒、撰善法戒、饒益有情戒、從^ニ今身^ニ至^ニ佛身^ニ迄能持否、^三唱、次回向(以下略)

とあるように、地藏菩薩は葬儀の場における本尊として機能していたことは明らかである。こうした地藏を本尊とする葬

儀の場所が、中世末から近世初頭にかけての郷村的な村落共同体の中で寺院としての体裁を整えてゆき、地藏菩薩を本尊とする多くの曹洞宗寺院が成立していったのではない⁽⁹⁾かという見通しについては、すで発表したので再説しないが、こうしたことを考慮すれば「十三仏之切紙」が葬儀関係の切紙であらうことはほぼまちがいないと思われる。

四、おわりに

以上、今回は稿を急いだせいもあり、各切紙に対する充分なコメントをつけるにはいたらなかったが、堂塔・伽藍、及び仏・菩薩に関する現存する切紙の大意は紹介し得たと思われる。

これまでの項は殆んどが叢林や禅僧自身の第一義的なあり方に関する切紙がほとんどであったが、次回予定の分類項目第五追善・葬送供養の関係の切紙は、禅僧が実際に在家布教し、地域展開を遂げて行く際の極めて具体的、実動的な活動に関するものであり、地域民衆の宗教的要求に曹洞宗僧侶がどのように対応し答えていったのかを具体的に提示する資料ばかりなので、やはり若干の位置付け、コメントが必要になることと思われる。

注

(1) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(三)(四)(六)」(『駒沢大学仏教学

部研究紀要』四十二号、昭和五十九年三月、同四十三号昭和六十年三月、『駒沢大学仏教学部論集』十六号、昭和六十年十月）。

(2) 前掲「中世曹洞宗切紙の分類試論(五)」参照。

(3) 杉本俊竜『洞上室内切紙参話研究并秘録』六二頁(昭和十三年七月、滴禅会刊)も、「禅林七堂ノ図并参」を第一章行持部に配している。

(4)(5) 横山秀哉「曹洞宗伽藍建築の研究」(『東北大学建築学科学報』第三号、昭和三十年三月)参照。

(6) 天台宗では中堂・講堂・戒壇堂・文殊堂・法華堂・常行堂・双輪様の七堂、真言宗では金堂・講堂・灌頂堂・大師堂・経堂・大塔・五重塔の七堂とする(『望月仏教大辞典』一九一〇頁)参照。

(7) 横山秀哉「曹洞宗の塔頭の性格と建築」(『宗学研究』第三号、昭和三十六年三月)参照。

(8) 杉本俊竜前掲書もやはり「勃陀勃地切紙」を嗣法部に入れている。

(9) 筆者の昭和六十年十月四日、身延山短期大学における日本仏教学会学会術大会における発表「中世仏教における菩薩思想―特に地藏菩薩信仰を中心として―」、次号の『日本仏教学会年報』五十一号に論文掲載予定。